

めにも一読をすすめたい稀に見る高著である。

(山崎謹哉)

中川浩一著 地下鉄の文化史：筑摩書房，1984年，A5判，324頁

著者は、既に、『旅の文化誌』（1979年，伝統と現代社）『鉄道記念物の旅』（1982年，クオリ社）などの著書及び『産業遺跡を歩く——北関東の産業考古学——』（1978年，産業技術センター）の編著において、アカデミーの約束ごとに囚われた記述のスタイルをとることなく、その意味では、非学術的な形をとりながら、自らの学問的発見を発表するという独自の方法を確立したが、本書もこのような著者独自のスタイルで書かれている。地理教育の歴史の研究者としてのみでなく、鉄道マニアとしても著者はよく知られているが、今回は、地下鉄に焦点を合わせ書き下ろしたものである。地下鉄の歴史そのものが120年余りしかないのであるから、歴史学的研究と言って、そんなに古い史料を使ったものではないが、本書は、歴史地理学における新しい知見を数多く含んでいる。学術書として書かれたものではなく、従って、出典や資料も記されていないから、それを学術的な成果と言うことはできないかもしれないが、過去の路線の復元のみでなく、過去の都市生活において地下鉄がもった意味、人々が地下鉄をどのようなものと考えていたかといったことが、歴史地理学のテーマと深く関わっていることは、論をまたない。その意味で本書は、歴史地理学にとっての豊富な情報源であり、幾つかの歴史地理学的研究テーマを示唆するものでもある。たとえば、過去のガイドブックや文学作品における交通体系に関する記述の中で、地下鉄がどのような位置を占めていたかということを体系的に検討することなどは重要な一つの課題となるであろう。

歴史地理学の研究とは言えないかもしれないが、本書におさめられた「漱石とロンドン地下鉄」および「漱石とメトロ」の二つの文章は、夏目漱石研究にとっては、立派な貢献をなすものであろう。おそらく、著者も意識してのことであろうが、この二つの文章は、単なる知的、エンターテインメントのための材料の提供にとどまらず、著者の推論を説得的に示そうとして、資料・出典なども本文中で詳しく示されている。この著者の漱石研究の直接的契機は、祖父が漱石の熊本時代の五高校長だったことによる

のであるが、外遊時の漱石に関する著者の研究には、地理学者としての素質も生かされていると言えよう。

本書は、歴史地理学の研究書として書かれたものではないから、それに対する言及が無いのは当然のことであるが、地下鉄と歴史地理学との関係ということになると、多くの都市において、地下鉄の建設作業によって、たくさんの遺跡や文化財が発見されたことにも言及しなければならない。どこの国でも、文化財保護に対する関心が大きくなっている現在では、遺跡にぶつかれば、地下鉄建設作業は、それだけ遅れるのであるが、初期の地下鉄建設時代には、十分に調査しないまま貴重な遺跡を、セメントで塗りつぶしてしまったこともあったろうと想像されるのである。

(竹内啓一)

室賀信夫著 古地図抄—日本の地図の歩み：東海大学出版会，1983年，A5判変型，230頁，3,000円

本書は、1982年2月に逝去された故室賀信夫教授の遺稿集である。著者は、生前仏教系世界図の研究によって、Imago Mundi 賞を授賞されており、地図学史研究の世界的な権威である。仏教系世界図に関する論文は、本稿には収められていないが、所収の11篇の論考いずれにも、著者の地図学史観を見出すことができる。

本書は、4部から構成されている。各部にはとくに標題はないが、第I部では、近代以前の日本の小スケールの地図の歴史が総論的に扱われている。第II部は、西洋や中国が、東アジアや日本に対する地理像をいかに結んでいったかを論ずる。第III部は、地図屏部、ポルトラーノ図、大日本地震之図、東海道分間絵図、長久保赤水など、地図学史上の重要な地図や人物を扱う。第IV部では、日本のテラ・インコグニタである「北方」に対する観念や、同じく蝦夷地の地理学史的意義を論じたものである。本稿では、これらを個々に評することはせず、主に著者の地図学史観、あるいは地図観に焦点をあてることにする。

著者の地図学史観は、まず副題と同名の巻頭論文において端的に述べられる。それによれば、地図の歴史は単に地図作成技術の進歩を跡づけるものではない。それぞれの地図に表現された地理的知識や表現技術の背後にある「その図を作りその図を使った人びとの心情と生活」に着目することである。これは、著者が地図を見る時の一貫した姿勢である。こ